者の発表があつた。ABC順に読み上げられる氏名、ついに私の名前が呼ばれた。私は思わず万歳を叫んだ。出発の前日、カラガンダの市街へ出してもらつて、百貨店で土産物を買つた。私は綿布十ヤールと皮靴一足、それに「カズベック」という巻きたばこ六箱を買い求めた。国立劇場でロシアバレエを観たいと思つたが、財布の中身をのぞいて断念した。

十月三日、思い出のカラガンダを出発。学習と合唱に明け暮れて十数日、歓喜と緊張で体を硬直させながらナホトカの砂地に跳び降りたのは昭和二十三年十月十九日であつた。

炭坑の灯

静岡県 前 沢 豊 次

ノボシビルスクの近くにあるシベリア最大のクスバス炭坑のラーゲルに入ったのは、抑留生活も三年目を迎えた初秋ころであつた。高い板塀と有刺鉄線の幅広

い垣根とに、くまなく圍繞された外観の頑強さに比べ、半地下式の耐寒構造の低い宿舍がさびしく立ち並ぶラーゲル内部の眺めはいずれも同じことであつたが、炭塵にまみれたうす黒い町並みのそこに屹立している数々のボタ山からは、炭坑町の厳しい環境をうかがわせていた。

炭坑でのラポータ（労働）は地上での雑役と地下の採炭現場とに分かれていたが、だれもが坑内作業を恐れていた。長く続く陰うつな炭道、暗黒の地底での陰惨な労働、「佐渡の金山この世の地獄」のイメージもさることながら、真相のほどは分からないが、前年この地区の坑内で大きなガス爆発事故があり、二百人もの死者が出たというニュースが、ラーゲルに到着早々口コミで伝えられていたからである。

炭坑での地上作業をしていた折のこと、ふとしたことから現場監督にいらまれた私は、ブローホラポータ（怠業者）の烙印を押され、懲罰として坑内作業に回される羽目になつてしまった。

入坑に際しては、捕虜たちには堅坑のエレベータの

利用が禁止されていた。歩行者用の斜坑の坑道は素掘りのままであった。天井からしたたり落ちる地下水のしずくの音が、闇にこだまして不気味である。だれ言うことなく「地獄の一丁目」と名付けられ、毎日の坑内作業の往復に通る難所であった。

足元に注意しながら急坂な斜坑を百メートルばかり降りて行くと急に前方が開けて「ワゴン軌道」の通っている広い地下道に出ることになる。これがメイン坑道である。この複線の電車軌道のある本坑道の両側には、奥に向かって支坑道が樹枝状に幾つも分かれていて、その先端が「切り羽」となり採炭活動が終日休みなく続いていた。私たちの作業班の切り羽は、地獄の一丁目の入口から歩いて三十分ぐらいのところにあつた。

坑内作業班の編制は、現場監督（ナチャリニック）を中心に、おおよそ十四、五人を一組としてまとまっていた。大部分がソ連人の労働者で、先山、削炭、ハツパ、坑木係など切り羽での主役を担当する。その他に石炭かき（集め）、積み込み、ワゴン押し、軌道

（清掃）など分担するのであるが、その中に日本人捕虜が四く五人加わっていて、彼らの助手としての仕事割り当てられた。また班内に婦人が二く三人入っていたことは驚きであった。彼女たちの坑内での仕事は軌道の清掃、ガス探知などの軽作業であったが、時には我々と同じ作業が割り当てられて、終日一緒に働くこともあった。

坑内作業に入り最初に与えられた仕事はワゴンチック（炭車押し）であった。本坑道から分かれて切り羽までの一車線の狭い坑道には、ワゴンの空車がぎつしり入ってきている。それに石炭を満載させて一台ずつ、電気機関車の来る坑道まで押し出していくという、文字どおりのトロッコ押しであった。

ワゴンチックは、二人一組で受け持つ作業である。相手は時々変わったが大体ソ連人とペアになり、終日コンビを組んでのきつい仕事であった。あるとき、体格のよい若いマダム（婦人）と組んだことがあった。初めて見るマダムである。坑内では年齢や顔立ちなど全くわからなかった。声や動作でおおよそ見当をつけ

三十歳前後かと思つた。真つ黒な坑内服にすつぱりと頭巾をかぶり目鼻だけしか出していないので、作業中素顔を見る機会はなかつた。二人での共同作業であつたが、主導権はいつも彼女が握り、動作も機敏で積極的によく働いた。「ヤポンスキー、ダワイ、ダワイ」(日本人がんばれ)の掛け声は、全く男並みの迫力で、よく気合を入れられたものである。

数日後のこと、入坑前に事務所で作業班全員の集合があつたとき、初めて彼女の素顔に接する機会が到来した。まだ二十歳前後の若い娘であつたことには驚きの他はなかつた。彫の深い引き締まつた顔立ちではあるが、目の色、髪の色から見てスラブ系のロシア娘ではないが、はたして何族、何人であるかは見当がつかなくかつた。

満炭にしたワゴン車を本坑道まで出し終わると、次の空車が入るまでの間に幾らかの休憩時間が出ることもある。坑木の丸太の上に腰を下ろして、積込み係、ガスマダムたちとよく雑談をすることがあつた。彼女は無口であまり仲間に入らなかつたが、彼女が「ワー

リヤ」と言う名前のタタール人であることがわかつてきた。大ぜいの同族の人たちと一緒にこの炭坑で働いており、当年二十歳ということである。彼女たちタタール人の集団がいかなる理由でこの地にいるのかは、そのときは知る由もないことであつた。

ある朝のことであつた。入坑の指示を受けた事務所に入ると、ワーリヤが監督と大声で話し合つてるところに出会つた。激しい口調と彼ら独特のゼスチュアから見ても、口論に違いないと思つた。日ごろ無口なワーリヤが、にぎりこぶしでテーブルを叩き、わめき立てるように喋り続けていた。会話の内容はわからなかつたが、よほどの事情があつたに違いない。ワーリヤの目には涙が浮かんでいた。監督の方は冷静で口数も少なく、時々両手を広げて肩をすぼめるあの外人特有のポーズをして見せるだけであつた。

その日から私たちの坑内作業班の中からワーリヤの姿は消えてしまい、再び逢う機会はなかつた。

交代時間が近づいてくるとガスマダムの持つガス検知のカンテラの灯を先頭に、次の作業班の人たちが切

り羽に入ってくる。坑道の暗闇の奥の方から人声が聞こえてきて、幾つものカムラート（携行灯）の灯が揺れながら足音と共に近づいてくると、その日の作業はやつと終了することになる。ナチャリニツクの「ダワイ、ダモイ」（帰ってよい）の声を聞いて帰路につく。斜坑の急な坂道を登り切ると明るい坑口がまぶしく目に入ってくる。地上に出るから事務所まで歩いて行くとき、太陽の明るさと空気とうまさが身にしみて、まぶしさに目を細めて思わず深呼吸をしてしまい、炭塵によごれた真つ黒な顔を見合せて、今日一日の安隠無事に安堵したものである。

炭坑内での採炭作業は、幾つもの悪条件の重なったきつい労働であった。落盤、ガス爆発などの被害をいつも内蔵し、よごれよごんだ地底の空気、入出坑のわずらわしさなど、枚挙にいとまがないほど劣悪な条件下におかれたものであったが、それでもなお捨てがたいものを持っていた。それは厳冬季、氷点下三〇度を超える酷寒の中での地上作業に比べれば、まだまだであるということである。

クズバス炭坑地区内にあったラーゲルでの生活は、帰国までの二年間続いた。そのうち坑内作業に従事したのは半年余りであったが、その時の強烈な印象は今も変わりなく残っている。

抑留報告書

- 1 ① 大正二年一月二十五日、静岡県磐田市にて出生。
- 昭和十年、立正大学高等師範科卒業。中高教員生活三十年。
- ② 家族、妻と子供三人、孫六人。健在。
- 2 昭和二十年七月十五日、平壤工兵隊へ警備召集として入隊。

3 終戦後平和裏に進駐し平壤市内へ。

4 ① 平壤工兵隊にて全員宮庭に集合、ラジオ放送を聞き、終戦を知る。戦争が終わったという安堵感があり、部隊内には混乱はなかった。

② 現地召集者が除隊した後、残留者は武装解除となった。

③ 北鮮での治安は、金日成の政府によって一応保たれていたが、市民による家屋、住宅の接収、戦

犯の追及など厳しく実施された。またソ連兵による掠奪や暴行も当然のことながら頻発した。

5 ① 武装解除後、平壤三合里の収容所へ、その後延吉、富寧、古茂山と移動中越冬。

② ポセツトに上陸したのは翌年の五月で、シベリア鉄道を西へ、ノボシビルスクから分れてカザフ共和国のウスチカメノゴルスクのラーゲルに入るまでの十五日間の旅であった。

6 ① カザフ共和国での土木建築工事とコルホーズの作業、クズバス炭坑での坑内採炭作業などが主だった。

② 入ソ前、北鮮の富寧の収容所での発疹チフスによる死亡者は、大隊（千名）の三分の一にも達する大被害をこうむる惨状があった。

③ シベリアのラーゲルでは大体千名単位だったが、平壤の三合里では二、三万人、延吉は一万人以上、富寧は五千人程度収容されていた。

7 ① ウスチカメノゴルスクでは土木建築関係とコルホーズの作業。クズバス炭坑では地上での雑役と

坑内の採炭現場での坑夫の作業。

② ソ連人並みの高いノルマで、完遂できなくて苦勞した。

③ ノルマ食事（パーセント給与食事）と称する作業量に応じて給与（食事）に差が付けられ、労働意欲を高める手段として利用されたことは、非人道的な卑劣な制裁として忘れられないことである。

8 ① 個人の選択の自由は全くなく、すべてソ連側の命令による強制労働に従う他はなかった。

② 月例の身体検査で三級者以上は全員労役につかせられた。

③ 衣食住のすべてが画一的で自分で管理することはできなく、また気分的にも落ち込んでいた。冬季など凍傷にならない注意をする程度がせきの山であった。

④ 防寒用具は旧日本軍用のものが多かったが、終わりごろ（四年目）にはソ連用に変わっていった。特に防寒長靴はよく利用された。

⑤ 主食は黒パン三百グラムとカーシヤ（かゆ）、

それにスープ（野菜、ポテト、肉のごた汁）。一日三食であったが、満腹感は味わえず、いつも腹七分程度で、慢性の飢餓感に苦しんだものである。食物の不足分は野草を食べる以外になかった。雑草は何でも食べたが、その中でアカザがおおいかった。

炭坑（坑内）作業中は給料をもらったので食料の購入ができ、慢性の飢餓感から一時的ながら解放されたことがあった。

⑥ 日曜日は与えられた。仲間での演劇がよくあつて楽しみにしていた。また囲碁のグループもできて楽しかった。

⑦ 洗脳教育については、乗船前の一カ月のナホトカでの民主化教育は特筆すべきものであると思う。ソ連とスターリンに忠誠を誓い、日本に敵前上陸、代々木直行の誓詞に署名、革命歌とアジテーションに明け暮れたあの騒ぎを顧みるとき、後の日本赤軍事件やこの度のサリン事件でのマインドコントロールと相通するものが連想されてならない。

⑧ クズバス炭坑のラーゲルにいた時のこと、地上での雑役作業をしていた折、勝手に休憩したという理由で現場監督からならまれ、プロローホラボータの烙印を押されて、懲罰として坑内の採炭現場に回されてしまったことがあった。

9 ① 終戦により降伏した同じ引揚げ軍人でありながら、ソ連抑留者の側に「捕虜」という意識やイメージが強く残されていると思う。勅命により降伏したという一般的な敗戦意識に対して、戦いに完全に敗れたみじめな敗北と、引き続きのシベリアでの悲惨な捕虜く抑留生活の体験に自虐的心境にまで落ち込んだ故ではなからうか。勝てば官軍で負けたからには致し方ないこと、狙上の鯉として敗れし者の宿命に甘んじようと覚悟は定めたものの、不安と焦燥にさいなまれたものであった。

② 生きてさえいれば必ず故国の土が踏める時が来ると心に誓い、現実の生活をしっかりと見つけることを心掛けてきたと思っっている。

10 ① 昭和二十四年六月、クズバス炭坑のラーゲルに

て。

② クズバス炭坑―ノボシビルスク（シベリア鉄道）―ナホトカ（約一週間）。

③ 乗船は円滑であった。

④ 船内生活には特に異状はなかった。

⑤ 舞鶴上陸は昭和二十四年八月七日。

11 ① 教職に復帰するための適格審査が遅れたためす

ぐ就職できず、復職後も不利な条件が多かった。

平壤に残してきた家族、妻と三人の子供たちも

一年後無事帰国しており、その後も順調な生活を

続け今日に至っているのは、何より幸いと思っ

ている。

② シベリアでの抑留生活を共にしてきた戦友の中

で、帰国後も文通し、互いに消息を確かめ合っ

きた十人ばかりの人たちの中で、今日、生存者は

私を入れて二人だけになってしまった。時の流れ

とはいえ、まことにさみしいものである。

肉親五人の訃報を聞いた

収容所バルハシ

和歌山県 森 中定 夫

大正七年一月四日生まれ。櫻川一五〇九番地、私は五男です。郷土の学校卒業後は農業に従事するかたわら青年学校に通い、二十歳のとき、徴兵検査を受け甲種合格。日中戦争の最中、昭和十四年五月一日、現役兵として和歌山中部第二十四部隊第四中隊に入隊し、初年兵教育を終え、南支派遣軍として同年八月、大阪港出航、広東に上陸し、直ちに警備任務につき各方面へ派遣され、従化荘付近の警備に続き各戦場で砲火を潜り、九死に一生を得て昭和十八年四月凱旋、「勲八等白色桐葉章」、従軍記章を受けた。

その後、昭和二十年四月（当時二十七歳）、和歌山開拓団として満州国滨江省五常県山河屯さんかふとんに入植、新天地の開拓に希望を燃やしたわけであります。